

大野城市の文化財6 (夏越し祓い祇園踊りの絵馬)
大野城市教育委員会



「夏越し祓い祇園踊り」乙金宝満神社（市指定有形民俗文化財）



乙金宝満神社拝殿

大野城市の北東部、乙金区にある乙金宝満神社拜殿には「夏越し祓い祇園踊り」と名づけた絵馬が掲げてあります。この絵馬は市内の神社に奉納してある絵馬の中で最も古く、江戸時代後期の天保2年（1831年）博多の町絵師、村田東圃によって描かれたものです。

11人の男女が手に手に扇を持ち、輪になり右回りに踊っています。その身のこなし、表情から踊っている人物の生き生きとした楽しそうな様子、さざめきまでもが伝わってきそうな絵馬です。

額は檜で縦117 cm、横188 cmと大きく、「天保二辛卯六月十日産子中」「應需東圃寫□」（もとめに応じて東圃（これを）写す）の紀年銘があります。旧暦六月は古来、祓いが行われる月で、この絵馬は風俗画として当時の習俗、また服装、髪形などを知る上でも貴重な作品です。1994年（平成6年）3月18日に大野城市有形民俗文化財に指定されました。



絵馬とは

願い事や願いがかなったお礼のしるしとして神社に奉納する絵入りの額や板絵を、絵馬といいます。絵馬の風習は古く、奈良時代の遺跡から馬を描いた板が出土しています。もともとは生きた馬を神に捧げたことが始まりといわれています。神の乗り物と崇めていた馬を雨乞いや日乞いの時に献上しました。しかし生き馬の調達が困難なことから馬形（土で作る



絵馬が掲げある風景 乙金宝満神社

土馬・木で作る木馬)が、転じて板に馬を描く絵馬が奉納されるようになりました。室町時代末期、馬以外の図柄が現れ、大きな額に合戦図などが描かれ、同時に庶民の切実な願い（結婚・出産など）を絵にした小さな絵馬も作られ始めました。文化文政の頃、絵馬は隆盛を極め、図柄も多様になり、舞踊を題材にした絵馬もみられます。絵馬はその時々の人々の心、その時代を反映したものであります。今でも受験の季節になると、合格を祈願して絵馬をあげる風景が見られます。



「すもうの図」山田宝満神社

夏越し祓いとは

古代から6月と12月はそれまで半年のけがれを祓い浄め、その後半年の無事を祈る「祓え」という神事が行われてきました。旧暦六月三十日に行

われる祓えを「夏越し祓い」といいます。夏は災害が多く、疫病も流行するため、茅の輪くぐりや人形流しの祓いをして夏を乗り切りました。祓園祭も疫病神を祓うお祭りなのです。

大野城市の絵馬

市内の神社には110枚ほどの絵馬が奉納してあります。大きな額絵がほとんどで、題材も神功皇后や源義経などの武将図と合戦図が半数以上を占めています。神功皇后の伝説がそこに残っていること（御笠の森など）と、勇壮なものが好まれたことがわかります。その中で異色ともいえるのが、山田宝満神社の「すもうの図」です。躍動的な力士たちに当時のすもうの人氣が窺えます。また下筒井の黒男神社では毎年12月に子ども絵馬懸が行われています。

昔、神社はギャラリーの役目もしていました。神社に集い、「夏越し祓い祓園踊り」の絵馬の都会的な姿をみて、都へのあこがれをかき立てられたのではないのでしょうか。



子ども絵馬懸 下筒井黒男神社